

明るい小矢部

No. 174
2012年 2月号

発行
日本共産党
小矢部市委員会
小矢部市七社 245
砂田 喜昭
TEL 67-4322
FAX 67-4842

新しい視点 展望しめず

しんぶん赤旗

日刊紙 ●月3,400円
日曜版 ●月 600円

暮らしと営業、経済と財政を壊す

消費税増税

ばったり会った店主の「さん、開口一番消費税増税大反対だ、こんな不景気なのに、商売やっつけない口では反対と言っている党もあるが、本音は引き上げではないのか」と。これが庶民の気持ちではないでしょうか。

消費税しかないのか？

通常国会の施政方針演説で野田首相は税と社会保障の一体改革「だ」と消費税10%を打ちだしました。消費税増税では自民党も民主党も同じ立場で大手マスコミも社会

保障財源には消費税しかないかのよう煽っています。決して財界、富裕層への減税(7兆円)をやめろとは言わず、米軍関係費(660億円)や1機100億円もする次期

社会保障拡充と財政危機打開へ



日本共産党の提案

日本共産党の志位委員長は1月27日の代表質問で、社会保障拡充と財政危機打開のための三つの政策を提案しました。

(1) まず、巨大開発や原発推進予算、米軍思いやり予算、政党助成金など多量に増税を入

れる。富裕層、大企業優遇の不公平税制を見直し、応分の負担を求め。

(2) 二つの段階では、社会保障を抜本拡充するために国民全体で支える。「応能負担」累進課

税の原則にたった税制改正で財源を確保する。

(3) (1)(2)と同時並行で、よりある経済社会に前進する。正社員が当たり前の社会をつくり、最低賃金を大幅に引き上げ、大企業にたまった260兆円にのぼる内部留保を社会に還流させ、内需主導の健全な経済成長をもたらし。

戦間機F35購入約40機、1兆円を削れとも、政助成金300億(廃止も言いません)

暮らしも営業も経済も、財政も大打撃を受ける消費税増税は、きっぱり止めなさい。

「富裕層に増税を」

米英仏でも合言葉に

一方世界に目を向けると、富裕層の増税を訴える動きが広がっています。アメリカ大統領は1月24日の上院演説で一般教書演説で「富裕層に増税し低所得者減税を」と主張していました。フランス大統領選挙でも有力な最大野党候補が「富裕層、銀行、大企業」

業の課税強化による財政赤字削減と雇用創出を訴えています。イギリスも自由民主党の副首相が「富裕層に増税し低所得者減税を」と主張しています。これが常識ではないでしょうか。



TPP交渉参加表明に断固抗議!

市議会が全会一致で意見書

小矢部市議会は政府のTPP交渉参加表明に断固抗議するとの意見書を全会一致で採択し、野田首相と関係大臣に提出しました。

砂田市議は一般質問でTPPの危険性を市民へしつかりと情報提供するよう求めました。

特に、交渉参加には事前にアメリカ議会の同意が必要で、アメリカの要求を丸呑みさせられる危険があること、日本の関税撤廃で市の基幹産業である農業が荒廃させられる恐れがあること

と、医療面では混合診療の解禁、株式会社の算入でお金がないと医者にもかかれなくなること、公共事業にもアメリカの大企業の参入を妨げる非関税障壁として、地元貢献の入札条件(消防団員の雇用、除雪への協力など)撤廃を迫られることなどがあげられます。



12月議会報告

石動小学校改築 26億円

6年生 新体育館で卒業式

石動小学校の耐震化のため全面改築工事が進められています。26億円をかけて2013年度までに完成させます。屋内体育館は今年度中に完成し、現在の6年生はこま卒業式を行う計画です。

にも対応できる柔軟な設計になっています。環境に優しい配慮も、暖房には深夜電力利用による蓄熱機暖房方式を採用、床暖房も取り入れます。太陽光発電(5KW)を設置し、普通教室、街灯などにLED照明を取り入れ、省エネを実現しています。

国保医療費

窓口負担減免制度実施へ

災害で死亡、心身障害者となり又は資産に重大な損害を受けたとき、または大災による不作為、倒産失業などで収入が減少したとき、国民健康保険の医療費窓口負担(一部負担金)を減免する制度がこの1月からスタートしました。砂田市議が繰り返しこの実現を求めてきました。

減免基準など

免除 世帯の実収入月額が生活保護基準生活費の10%未満
減額 基準生活費の10%以上120%未満
徴収猶予 基準生活費の120%を超え、一部負担金が実収入月額から基準生活費を差し引いた額を超えるとき

いずれもその世帯の預貯金が基準生活費の3カ月以下であることが条件となりますが、土地、家屋など資産の有無は関係ありません。入院、通院とも減免等の対象になります。減免等の期間は免除減額の場合申請した月から3カ月以内(1カ月ごと更新)、徴収猶予は申請から6月以内です。

ひろば

「防災大国」キーンに世界が注目するわけ、築地図書館をこの正月に読んだ、帯には風速300キロ毎時のリケーンでも死者が出ない国とある。2005年、カトリックが先進国アメリカで死者1836人出した(風速50メートル毎秒)のに、貧しい開発途上国キーンではこの年、カトリックの他に2つの大型リケーン風速70メートル毎秒にも襲われたが、死者ゼロ、拒否はされたがアメリカで580名の医師による緊急医療救助隊の派遣を申し出た。この本に注目したのは訳がある。筆者の結婚40周年を記念してキーン旅行を、娘夫婦が企画してくれ、たからだ。カネタから4時間で、フクロ国際空港へ、上空から見ても山林原野が目に入らない不時着でもするのかと心配になったが、無事着陸したら、乗客が一斉に拍手。フクロの若者らのようだった。港から首都ハナハナ時間かけてバスで移動道中には椰子の葉で書いた屋根や壊れた家、牛や馬、山羊。地下道を抜けてハナハナ入ると、様相が一変。ビルが建ち並び、人と車、馬車で溢れていた。車は古く自動車博物館にいたかのようだ。ハリケーンの傷跡が壊れた窓、傷ついた壁も目についた。バスでラテンパドの生演奏を聴きながら、昼食。エカトルから来た女性は「ミニストの国で不安だったがみなさん陽気で安心した」と。ツアーガイドは元英語教師、リケーンのことを聞いてみた。Nobody Die誰も死なな、これに世界が目している。本にウンはなかった。